町民とともに考えるニセコ町の森づくり

ニセコ町役場企画環境課広報広聴係　大　野　百　恵

■はじめに

よい森とはどんな森でしょうか。理想的な林業・木材産業とはどんな状態を指すのでしょうか。だれがそれを「よい」「理想的である」と決めて，よい森づくり，理想的な林業・木材産業を方向付けていくのでしょうか。

私は大学で森林科学科に所属し，森林政策を専攻しました。先進的な森づくりを行っている国の政策として，北欧やドイツの持続可能な森林経営についても勉強しました。

日本とドイツを比較すると，国土面積はほぼ同じですが，森林面積は日本の方が広く2,500万haあり，森林率は67％。一方，ドイツの森林面積は日本の半分以下の1,100万haで森林率は32％。しかし，年間の木材生産量は日本の約3,000万㎥に対してドイツはその倍の約6,000万㎥。さらに，林業従事者数も大きく異なります。統計の取り方が違うため一概には言えませんが，日本の林業従事者数は約4万5千人（2015年国勢調査）なのに対し，ドイツは自動車産業の1.5倍近い100万人というデータもあります。ドイツでは，森林官の社会的地位も高く，子どもたちが憧れる職業の一つという話も聞きます。一体，日本とドイツの違いはどこからくるのでしょうか。

私は，人々の暮らしと森林の近さが関係しているのではないかと考えています。森林は土砂災害を抑えたり，木材を生産したりするだけでなく，山菜やキノコなどを育み，人の心を癒してくれます。木造の建物で過ごしたり，木材を使った製品が身近にある暮らしは豊かです。

どんな森がよい森か，理想的な林業・木材産業を方向付けるのは，林業従事者，木材産業従事者だけではありません。森林はすべての人にとって，豊かに暮らすのに不可欠な存在だからこそ，そこに住む人々とともにどんな森づくりしていくか，木材を取り入れたどんな暮らしをしていきたいかを話し合うべきだと思うのです。

■ニセコ町の概要

ニセコ町は，町の総面積197.13㎢のうち13.5％がニセコ連峰や羊蹄山といった国立・国定公園に指定された自然豊かな山岳リゾート地です。人口は5,002人（2021年1月末）で，2000年比9.8％増となっています。2000年以降，多くの自治体が人口減少する中，微増傾向にあることが特徴です。特に，外国人住民は319人（2021年1月末）と，ここ10年で約10倍になり，国際的にもニセコの評価が高まっています。

基幹産業は観光・農業で，観光客数は175万人（2019年度），外国人延べ宿泊数16万人泊（2019年度）と，観光客の部分でも外国人が増えています。2020年度は新型コロナウイルスの影響で外国人観光客数は大きく減少しましたが，町に定住している外国人も多く，コンドミニアムや住宅建設の勢いは衰えてはいません。

町政においては，2001年に全国初の「まちづくり基本条例」を施行し，「住むことが誇りに思えるまちづくり」を基本理念に，「住民参加」と「情報共有」の2大原則によるまちづくりを進めてきました。町総合計画基本理念の「小さな世界都市」から「環境創造都市」への変更，2014年環境モデル都市選定，2018年SDGs未来都市および自治体SDGsモデル事業選定など，最近は環境政策に積極的に取り組んでいます。

自治体SDGsモデル事業では，町の市街地に新たに「街区＝まち」を設けることとしています。この事業は，これまでのような土地を整備して宅地分譲をしていくやり方ではなく，コミュニティや交通などのさまざまな課題を解決していきながら，CO_2の排出も削減していくというまったく新しいコンセプトで取り組んでいます。

一方，ニセコ町は林業・木材産業従事者が少なく，将来的にも安定的な需要が見込まれるにも関わらず，住宅建築における域内調達率が著しく低いのが現状です。モデル事業の街区を形成していく上でも域内調達率は重要な要素となることから，役場においても，周辺自治体の林業・木材加工事業者とも連携しながら，

域内調達率・循環率の向上の必要性が認識されるようになりました。

■ニセコ町の森林

ニセコ町の森林面積は13,252haで，町総面積の約7割を占めます。森林資源は，全国および全道の状況に比べて天然林率が高く，所有形態では私有林が5割，道有林が5割近くを占め，残りは町有林で，国有林がまったくないという特徴的な森林構成となっています（**表1**）。樹種構成では，人工林は，面積比率ではトドマツが多いものの，カラマツは9齢級～15齢級（林齢45~75年）に集中していることから蓄積ではカラマツの方が多く，主伐時期の目安を超えています（**図1**）。

表1　ニセコ町の所有者区分別面積・割合

区分		面積(ha)	割合(%)
国有林		0	0
民有林*	町有林	589	5
	道有林	6,010	45
	私有林	6,653	50
	計	13,252	100
総数		13,252	100

*出典:ニセコ町統計資料「数字で見るニセコ」2020年5月版

森林の管理は，町有林・私有林は主に南しりべし森林組合が，道有林は羊蹄林産協同組合が担っています。どちらも蘭越町に事業所を構える林業事業体です。林業従事者はニセコ町19人，蘭越町51人（2015年国勢調査）で，ともに2000年に比べて増加しているものの，両町とも65歳以上の割合が全体の4分の1程度を占めていることから，今後，必要な森林整備を計画的に進めていくためには，将来にわたって林業従事者を確保・育成していく必要があります。

町有林は，最近まで十分な間伐が行われていなかったなど，計画的な森林整備がされていない状況にあります。また，町有林および私有林の間に原野商法による細分化された森林が点在し，その大半は不在地主や所有者不明の状況であるため，森林の集約化や団地化が難しいという問題を抱えています。

■ニセコ町の林業・木材加工事業者

2019年度，町が委託してとりまとめた「木材等の域内調達率向上へ向けた基礎調査」報告書によると，町の第1次産業事業者の山林所有者，森林整備・素材生産を「森林整備・素材生産」，第2次産業事業者の製材所を「素材加工」，第3次産業事業者の建設会社・工務店等，木工製品製作所等を「製品加工・販売」に分類し，最近の動向や関連する制度改正等の内容を加えて，**表2**のように課題が整理されています。

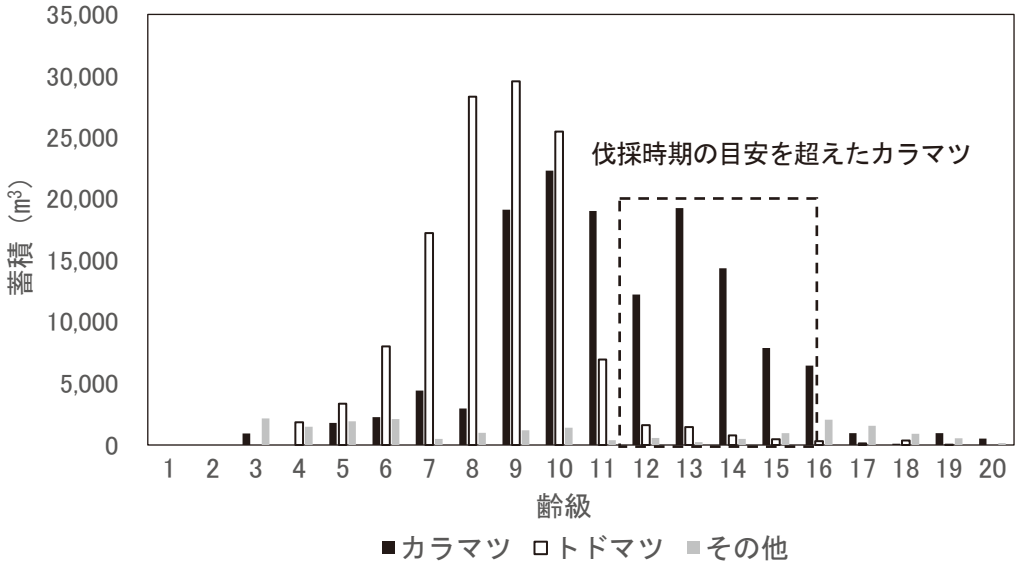

図1　ニセコ町の森林における樹種別･齢級別蓄積
出典：北海道水産林務部森林計画課「林種・ 樹種・林相別資源構成表（2019年8月28日）

表2　ニセコ町の林業・木材加工に関わる課題

	森林整備・素材生産	素材加工	製品加工・販売
現状	・体系的継続的な森林整備が行われていない ・計画的素材生産が行われていない ・多数の放置民有林、地主不在、細分化している土地 ・森林面積の76%が天然林広葉樹 ・積雪で施業時期が限定的 ・広葉樹は、薪で一定量域内消費	・町内に製材・乾燥機を持つ事業者がおらず、周辺地域にもトドマツ専用の乾燥機を所有する事業者が１社いるのみで、乾燥・加工が必要な工程（集成材・フローリング等）は遠方に輸送する必要があり、さらに輸送コスト・手間がかかる	・製品は梱包材が主流 ・地域材活用は公共建築に集成材構造材の利用が多く、住宅は一棟あたりの木材使用量が少ないことから既成ルートの域外材（プレカット・集成材）を扱わざるを得ない状況 ・製作所等は主に域外材を利用している
事業者	各山主 （有）川原種苗 南しりべし森林組合 羊蹄林産協同組合（道有林） 合同会社Hikobayu その他近隣の林業事業体	ようてい森林組合 三浦組木材工業（株） （株）ヨシダ 各広葉樹製材所	ようてい森林組合 三浦組木材工業（株） 合同会社Hikobayu 家具・木工・スキー・スノーボード製作所 建設会社・工務店
ポテンシャル	・天然林広葉樹割合が高く、樹種に応じた使途の広がり ・知識と技術のある林業家の存在 ・若手林業従事者の活動・存在 ・森林経営管理制度の創設 ・協力関係が期待できる近隣町村の林業事業者の存在 ・全道で広がりつつある広葉樹長伐期施業による持続可能な森林経営の機運	・簡易製材機を用いて自ら近場で素材を仕入れ簡易な製材加工をするログビルダー※の存在（ムカラウッドワーク） ・ようてい森林組合の新製材工場の余剰製材能力 ・しりべし・くつろ木の会の地域材の利用促進に向けた取組	・建築着工傾向や木造建物の築年数から新築・改修需要の見込み ・NISEKO生活・モデル地区の契機 ・しりべし・くつろ木の会の地域材の利用促進に向けた取組 ・地域材を丁寧に扱うログビルダーの存在 ・高い技術・センスを持つ家具・木工・精油・スキー・スノーボード製作所の存在、地域材の関心も有
課題	・計画的な森林整備及び素材生産の実行 ・放置された森林の対応策 ・将来的な人材確保・育成の検討	・木材を域内流通するための、製材・乾燥・加工機能の（一部）整備又はルートの構築	・木材を域内流通するための、製材・乾燥・加工機能の（一部）整備又はルートの構築

※ログビルダー：ログハウスを作る人のこと

出典：「木材等の域内調達率向上へ向けた基礎調査」報告書

この整理により，町産材の調達率向上に向けた最大の課題は，「体系的継続的な森林整備が行われてこなかったこと」にあることがわかりました。この課題が原因で，計画的な素材生産が行われておらず，生産量も限定的となっています。こうした背景から，素材加工や製品加工を行う事業者が町内には存在せず，加工の過程で近隣町村の事業者，さらには遠方の事業者へ搬出する中で，他産地の木材と混合して取り扱われ，「町産材としての木材が流通していない」という現状につながっています。

町産材が流通していないため，ニーズがあっても調達は極めて困難です。この課題を解決しない限り，持続可能な域内循環は実現できません。そのため，森林整備・素材生産の課題を解決する必要があります。

■町産材利用の現状

（1）薪

2015年に（公財）北海道環境財団が「家庭でのCO_2排出実態調査」でニセコ町民300世帯に行ったアンケート（回収率27%）によると，回答者の約2割が薪ストーブを所有しており，道内他自治体と比べるとニセコ町の薪ストーブ所有率は突出していました。確かに町内には住宅，飲食店，宿泊施設など多くの場所に薪ストーブが設置されています。薪の調達は，個人

で自身が所有する林の木を伐採して利用したり，事業者に直接問い合せて購入したりしているため，使用総量は不明ですが，林業家，南しりべし森林組合などが生産する薪が一定量流通しています。

4年ほど前から地域おこし協力隊の卒業生が，自伐型林業に取り組んでおり，ニセコ町や周辺自治体の森林から生産した薪が好評を得ているほか，トドマツエッセンシャルオイルやシラカバ樹皮のアクセサリーなども製造しています。自伐型林業とは，高い採算性を確保しながら，環境保全にも配慮した持続可能な林業の方法です。

（2）公共建築での利用

2012年，ニセコ町民センターが大規模改修を経てリニューアルオープンしました（**写真1,2**）。開口部の省エネや外断熱の施工，重油ボイラーから地中熱ヒートポンプへの転換など省エネ・自然エネルギーの導入に取り組んだほか，床材には地場産のシラカバを使用しています。さらに，内部の共有スペースには町内の木工作家さんによる椅子やテーブルを置いています。

写真1　ニセコ町民センター外観

写真2　町民センター内部の共有スペース

2015年には，それまで小学校の空き教室を利用して行っていた学童保育が，児童数の増加により空き教室が利用できなくなったことから，ニセコこども館（学童保育施設）を新たに建設しました（**写真3,4**）。翌年から運営を開始したこの建物は，町内で伐採したカラマツを大断面集成材に加工し，構造材や柱に利用しているほか，内装や断熱材にも木材を使用しています。暖房は地中熱ヒートポンプを採用し，建物全体の断熱強化（窓ガラス三重構造等）により建物の気密性を高め，徹底した省エネに取り組んでいます。

写真3　ニセコこども館外観

写真4　木材をふんだんに使った内部

2019年度から2年かけて工事をしてきた役場新庁舎・防災センターが2021年3月に完成しました（**写真5,6**）。この建物は，町産材ではありませんができるだけ道産材を使用し，フローリングや壁に「町の木」であるシラカバを使用しています。さらに，案内板に木を使用したり，待合スペースに町内木工作家さんによる椅子やテーブルを設置したりするなど木材の温かみが感じられる内観になっています。高性能断熱材の導入，高性能窓（木製とアルミの複合サッシトリプルガラス）

の導入により，躯体部の外皮性能は0.18W/㎡･kを実現し，全国の庁舎でもトップレベルに位置する省エネ性能となっています。さらに，熱と電気をつくるLPGコージェネレーションを導入し，災害時にはコージェネレーションからの自家発電によって一部の照明やコンセントが使用できるほか，廃熱を回収し建物内部に供給します。新庁舎の使用開始は2021年5月です。

写真5　ニセコ町役場新庁舎の開口部

写真6　建設中の新庁舎の内部

このように，町産材は，薪や公共建築での建材利用が主であり，葉や樹皮を活用する事業者も見られますが，現状では，用途は限定的です。町産材の利用を促すには，町内周辺で製材・乾燥・加工機能の整備またはルートの構築や利用促進に向けた情報発信などの取り組みが求められます。

■みんなで進める森づくり

薪ストーブユーザーの多さに見られるよう，多くの町民にとって，森は身近な存在です。私自身，薪ストーブを自宅に導入し，薪割りをしたり，季節になれば毎週のように家のすぐ近くで山菜を採ったり，暮らしと森林が密着しています。だからこそ，そんな豊かな恵みを生み出す森林がずっと残っていってほしいと思います。

2019年度の調査でわかった「体系的・継続的な森林整備」「町産材の利用促進」といった課題を解決するため，町では現在，長期的な森林の将来像を見据え，町の地域特性に応じた森林整備や木材の利活用など，森林づくりの基本理念と方向性を示す「森林ビジョン」を策定しています。また，2019年度調査の委託先であった株式会社トビムシの協力を得て，2020年度は3回のまちづくり町民講座を開催しました。町民講座では，『里山資本主義』の著者，藻谷浩介さんにお越しいただき，地域内経済循環や少子高齢化の課題解決に林業の振興が重要であることをお聞きしたり，長野県池田町教育長の竹内延彦さんと会場をオンラインでつないで，自然保育に関するお話をお聞きしたりしました。いずれも多くの町民が参加し熱心に耳を傾けました。

よい森づくり，林業・木材産業を方向付けていくには，行政だけではなく，森林所有者・林業関係者・町民のみなさんなど，この町に住む人々が，町の森林をどのように暮らしにとり入れていきたいか，まずはビジョンの共有が必要です。その上で，ビジョンを実現していくにはどんな森林づくりをするか，それぞれの立場でどんな行動・活動が必要かを認識することで，望ましい森づくりが進められると考えられます。

森づくりもまちづくりの一つです。私も役場職員として，「情報共有」と「住民参加」を軸に，今後も町民のみなさんと一緒によい森づくりを進めていきたいと思っています。

■参考文献

ニセコ町：「木材等の域内調達率向上へ向けた基礎調査委託業務」報告書（令和2年3月）.